

箱入りDr.の溺愛は  
永遠みたいです！

### プロローグ

篠宮<sup>しのみや</sup>総合病院の院長で理事長の、篠宮<sup>あきら</sup>晃先生は名医である。

かつては御典医<sup>ごてんい</sup>だったという篠宮家はずーっとお医者様の家系だ。総合病院だし、気軽に受診するには敷居が高いけれど、先生の評判がいいので通院する患者は多い。

かくいう私、御園<sup>みその</sup>舞桜<sup>まお</sup>もその一人だ。

小さい頃、頻繁<sup>ひんぱん</sup>に原因不明の熱を出して寝込んでいた私を治してくれたのが晃先生だ。ちょっと珍しい症例だったらしく、最初に担当してくれた先生が晃先生に相談し、それからは晃先生が診察してくれることになったのだった。

初めて顔を合わせた時、また痛い注射や点滴をするのかと怯<sup>おそ</sup>える私に、ゆっくりと膝を折って視線を合わせながら、晃先生は優しく言った。

『舞桜ちゃん。舞桜ちゃんの病気を治すお薬はもうあるんだよ。それを飲んで、しばらく様子を見てもいいかな？』

その慈<sup>いつく</sup>しみに満ちた眼差しと、凜<sup>りん</sup>とした表情に、幼いながらにきゅんとしてしまった。

一週間ほど薬を飲み続けると、あっさり熱は下がって、すぐに退院できた。

それ以降も、定期的な受診が必要だったものの、私は一年もしないうちにすっかり健康になった。双子の妹の舞梨は、「よかった、舞桜ちゃんよかったね」と泣きじゃくっていた。

——そんなわけで。優しくて穏やかで、でも言いつけを守らないとちよつと怖い顔で叱る還暦過ぎの晃先生は、私の初恋の君である。

この求人は運命だと思いたい。

あれから十二年。私は無事に大学を卒業しようとしている。

晃先生への気持ちをお忘れず成長した私は、できれば医療関係に就職したいと思っていた。だけど、文系学部の私が医師や看護師、薬剤師などになるのは当然無理だ。

そう。悲しいことに、私は文系だ。微分積分高次方程式、聞いただけで頭が痛くなり、医師はもちろん、薬剤師になるのも早々に諦めるしかないレベルなのである。

ならばせめて、晃先生の病院付近で働きたいという不純な動機で、毎朝、大学の就職相談室に求人案内を見に行くのが日課になっていた。

そして今日、篠宮総合病院の医療クラーク兼医療事務の求人票を見つけた瞬間、私は就職相談室のお姉さんに飛びつく勢いで声をかけ、面接の予約を取ってもらったのだった。

まさか、うちの大学に篠宮総合病院からの求人が来るなんて！

私が驚くのは理由がある。

篠宮総合病院は地元でも有名な超ホワイト企業。つまり、辞める人が少ないので、採用が毎年あ

るわけではない。もしあったとしても、私には絶対になれない医師や薬剤師ばかりだ。

だけど諦めきれなかった私は、医療事務とクラークの資格を取って、学生の中から長期休暇は近くの診療所でバイトをしていた。何故ならこの分野は、資格より経験が優先されるからだ。

そんなところに、資格を活かせる求人が来るなんて、奇跡だ！

「——それじゃ、御園さん。こちらの紹介状を」

就職相談室のお姉さんは、私の在学証明を兼ねた紹介状を渡しながら、念を押してきた。

「こちら、なかなか採用されなくて……何人か不採用になってますが、御園さんは資格もあるし、アルバイトとはいえ実務経験もあるから、期待します。頑張ってくださいね」

「はい。頑張ります」

これまで、地道に経験を積んできてよかった！

すっかり健康になった私は、ここ数年、篠宮総合病院には行っていない。

ほぼ十年振りに初恋の先生に会えるかもしれないという期待を抱きつつ、私は意気揚々と面接に赴いたのだった。

\* \* \*

面接は滞りなく終わった。

残念なことに面接の場に晃先生はいなかった……当然ではある。

普通に考えて、院長である昇先生が、医師ならともかく医療事務やクラークの面接にいるわけではないのだ。がっかりしたのは確かだけれど、もちろん、面接は全力で頑張った。

だけど、面接を終えた感触としては、微妙なところかもしれない。というのも、私は診療所での事務経験はあるものの、入院事務を担当したことがなかった。篠宮総合病院ほど大きな病院の事務として働くには、経験が浅いかもしれない。

採用してほしいなあと思いつつ、職員用の出入り口から病院の裏手に向かった。歩きながら足に痛みを感じる。慣れないパンプスを履いてきたから、靴擦れができたのかもしれない、と足下に視線を向けた。

……手帳？

そこに、黒い小さな手帳が落ちていた。革の色艶いろなからして新品。そして高級品。

落とし物だと気づいて、場所を確認する。ここは、職員用出入り口のアプローチ階段を下りてすぐ。つまり、病院関係者の落とし物である可能性が高いということだ。

そう判断した私は、靴擦れした場所に手持ちの絆創膏ばんそうこうで応急処置をしてから、くるつとUターンして院内に戻るのであった。

「これは……」

職員用出入り口に面した警備室に落とし物を持って行ったら、何故か事務棟に案内された。

総務課と書かれた部屋のドアをノックし、私は警備室で話したのと同じ内容を話す。

対応してくれた女性——草葉くさばというネームプレートをつけていた——に落とし物を見せると、困ったように眉を八の字にしている。落とし主を探すには中を確認するしかないけれど、モノが手帳だ。プライベートな内容満載だったら気まずい。

しかし、見ないことには確認のしようがないのである。ただ、一人で見るのは荷が重いので、二人で同時に見ようとお互いにアイコンタクトして頷き合う。

そうして開いた手帳の中身に——草葉さんと私は絶句した。

記されていた内容はともかく、何とも個人的な字だった。特徴的な癖字くせじとでもいうべきか。ところどころ英語やドイツ語っぽいものが交ざっているので、医師の持ち物かもしれない。

「えーと……二十日十八時、加藤Drかとうの講義に出席の返事。二十三日、四辻教授懇親会は未定」  
適当に読み上げる私に、草葉さんが「え」と小さな声を上げて、こちらを見た。いや、私じやなくて、手帳を見てください。

途中まで読んだ私は、草葉さんに話しかけた。

「この、加藤先生……と、四辻先生に關係のある方の落とし物ではないでしょうか……って痛いです、草葉さん！」

「よ、読めるんですか？ ミサワさん！」

「御園です」

「失礼しました。それより、コレが読めるんですね御園さん！」

私の両肩を掴つかんで揺さぶる草葉さんは、さっきまでの「可愛いふわふわキラキラ女子」の仮面を

かなぐり捨てて聞いてきた。その様子は、はつきり言えば怖い。

「読め……ます、けど……」

「このどうしようもなく汚くて下手で癖が強く暗号にしか見えないようなモノが、読めるんですね!？」

「そこまでひどいだろうか……」

開いたまま置かれている手帳に視線を向けてみたけど、普通に読める。

「日本語と数字なら読めま——」

「神様ありがとうございます!」

言い終わる前に、草葉さんが天に向かって叫んだ。

……ヤバい人だろうか。とても可愛いのに。

「ちよっとここでお待ちくださいね、ミサキさん!」

「御園です」

覚える気がないのか興奮しているせいなのか。草葉さんは、私を応接用らしいソファに座らせると、手帳を持ったままどこかへ走っていった。

そしてそのあと——私は何故か、再度面接を受けることになり、卒業後の雇用を確定されたのでありました。

## 1 私の仕事

私が篠宮総合病院に医療クラーク兼医療事務として採用されて三ヶ月。

残念ながら、院長である晃先生とは、未だお会いできていない。だけど、同じ職場に晃先生がいると思うだけで嬉しい。

この病院では、常勤の医師には必ず専属のクラーク兼事務員を一人付けることになっている。

入職早々ではあるけれど、私も篠宮環<sup>たまき</sup>という先生に付くことになった。

環先生はお名前通り、篠宮総合病院の経営者一族の一人だ。

といっても、跡取りではなく末っ子の三男坊。篠宮家は、環先生をはじめ兄妹<sup>きょうだい</sup>五人全員が医師。医学部の学費を五人分ぼんと出せる篠宮家って、やっぱりお金持ちだなあと感心してしまった。

環先生の担当は小児科。お兄さん達は心臓外科と循環器科、お姉さん達は内科と皮膚科の医師として、現在、五人全員が篠宮総合病院に勤務している。

そういう環境で、何故新卒の私が環先生の専属クラークに抜擢<sup>ぼつてき</sup>されたのか……

その理由はいたって簡単。

環先生の字が癖<sup>くせ</sup>字すぎて、私以外誰も読めなかったからだ。

あの日拾った手帳の个性的な字——環先生の走り書きをすらすらと読めてしまった私は、彼の

クラウドになるべく採用されたのである。

時代は電子カルテが主流となっており、医師の所見や処方薬剤などはすべてパソコンに直接打ち込んでいくスタイルである。

しかし環先生は、「人間が作ったものである以上、機械を盲信することはできない」と言って、未だにアナログの手書きカルテを併用している。私が専属になるまでは、看護師や薬剤師や検査技師が、カルテに書かれた内容を直接本人に確認しに来ていたらしい。

噂では、書いた本人ですら即座に読めないというくらいだから、現場の苦勞は相当なものだったろう。そんなところに、環先生の癖字を読める私が来たものだから、即採用となったそうだ。

「環先生。よろしいですか？」

午前の診察が終わり、今はお昼休み。私は環先生が午前の診察後に回診した入院患者さんのカルテを入力し、病棟へ転送する前にチェックしてもらおうと声をかけた。

幼児や小学生向けの可愛いキャラクターで飾られた診察室は、病院というよりは幼稚園に近い雰囲気がある。壁紙やインテリアもピンクや水色、薄緑といった優しい色合いだから、余計にそう感じるのかもしれない。

私の着ている事務員の制服も看護師さん達の着ている制服もパステル系の色合いなので、白衣の環先生がちょっと浮いて見える。環先生は無表情な美形さんだから、尚更違和感があった。

「何？」

「転送前の確認をお願いしますか」

「ん」

パソコンの画面と紙カルテの間で睨めっこしながら入力していた私の隣で、優雅に仕出し弁当を食べていた環先生が、画面を覗き込んできた。

私は今、環先生の診察デスクにあるパソコンを借りて作業している。環先生が移動してきたことで、息が触れそうな至近距離に彼のとても綺麗な顔が近づいてきて、私の心臓は——大変落ち着いていた。普通に脈打っていますけどキドキキなんかしません。

「うん。問題なし。転送していい」

そう言っつて、環先生は医師の確認電子印をボンと押印してくれた。

落ち着いているのに、時折さらりと耳をくすぐるなめらかな声は、医師より声優の方が向いているんじゃないかと思うくらい色気がある。

「はい」

ありがとうございますと軽く頭を下げた後、転送ボタンを押し、待つこと数分。処置チームその他のからの「受信完了」の返信を確かめて、私はふうと息をついた。

そして、そっと隣の環先生を窺い見る。

——まあ、確かに。

客観的に見て、環先生は綺麗な人だ。

顔面偏差値は、私を知る限り世界中で二番目に高い。

当然、一番は晃先生なんだけど、彼はその晃先生に似ているのだ。

同じ系統の美形を、柔和で温厚な紳士にしたら晃先生に、玲瓏れいろうとした涼やかさを強くしたら環先生になる……気がする。

背も高いし、本人が「医師は体力勝負」と言うだけあってジム通いで鍛えた体は引き締まっている。何より、声がいい。

声フェチなどところのある私は、最初の頃、環先生に「御園」と呼ばれる度にドキドキして、引っぱり返りそうになっていた。

晃先生に似た顔も好きだけど、聴覚に直接響いてくる声の威力は圧倒的だった。環先生の麗姿れいしは三日で慣れたけど、あの美声には未だ慣れない。

ちなみに私が「環先生」と呼ぶのは、ここには「篠宮先生」が多すぎるからだ。

晃先生と、その跡取りである長男夫婦——環先生のご両親に、叔父にあたる次男さん。そして環先生達まもろ兄弟。つまり、現時点で「篠宮先生」は九人もいるのだ。

なので、職員だけでなく患者さん達も「○先生」と名前で呼んでいた。

でも、晃先生だけは「院長先生」「理事長先生」と呼ばれている……が、心の中で呼ぶ分には許していたきたい。

半ば隠居状態の晃先生は、現在は入院患者をメインに診ている。高名な心臓外科医でもある晃先生は、お年のこともあり、今は手術もしていないそうだ。

……入院病棟にあまり立ち入ることのない私は、未だ晃先生にお目にかかれていない。でも、入職した時のパンフレットに載っていた笑顔の写真は、相変わらず素敵だった。

——などと思い返していたら、あつという間に十四時。

小児科看護師の大瀬おおせさんが「お待たせしましたー」と、患者さん親子に優しい声をかけながら診察室の前のプレートを「診察中」に変えた。

\* \* \*

社会人三ヶ月目、初夏を迎えた。

気温が上がって夏が近くなってくると、何故か小児科の患者数は増えて忙しくなってくる。小さな子は、体温調整が上手うまくできないからだろう。

午後の診察が始まるまでの間、私と小児科の看護師である大瀬さんで、夏用に診察室の模様替えを始めた。

涼しげな水色や青の色紙を切って星を作ったりしていると、ふと思いついたように大瀬さんが笑った。

「それにしても、舞桜ちゃんが来てくれて助かったなあ」

「どうしたんですか、いきなり」

「だって、環センセへの確認作業しなくてよくなったんだもん。もー、今までは口頭で何度も薬剤名やら量を聞いて、そのあと、また電子カルテで指示確認してたの。その間も、患者さんは放置できないし、本気で分身したかったわ、あたし」

篠宮総合病院はとても大きな病院なので、小児科には他にも先生がいる。だけど、環先生の「専属」として常勤している看護師は大瀬さんだけだ。

環先生の指示内容をチェックすると同時に、診察後の患者さん、診察待ちの患者さんの対応をするのは、確かにハードすぎる。

「ずっとクラークがセンセの字を読めればいいのにつて思いながら、あの字が読める奇特な人間なんていないって、諦めてたんだよね……」

大瀬さんは黄昏れつつも、ハサミを持つ手を止めることなく、可愛い星を量産している。

私は私で、「環先生の字を読んでもらえて助かる」と、事あるごとに感謝されて嬉しいものの、彼の字はそんなにひどいだろうかと思う。

あの字が読めるというだけで、即採用を決定するくらい困っていたのはわかる。

でも、環先生自身が、結構それを気にしているっぽいから、あまり触れない方がいいのではないだろうか。とはいえ、そのおかげで採用してもらったので、恩を返す為にも頑張りたい。

「大変だったんですね」

「そうなの。環センセも、診察してたり回診してたりするから、あんまり時間取らせるのも悪いし、皆が神経を張り詰めてたのよ。今は舞桜ちゃんが書き直してくれるから、すごく助かってる」

ほんと悪筆だからね、あの人……と呟いた大瀬さんは、いつの間にかとても可愛い子熊と子うさぎを作り上げていた。……これはお金を取れるレベルだと思う。私もハンドクラフトを学んだ方がいいかもしれない。

「こんな癖字、よく読めるよね。舞桜ちゃん」

小児科の看護師らしく優しげで可愛い雰囲気の大瀬さんは、結構毒舌というか、環先生には点からい。

「大瀬さんは環先生に厳しいですね」

「環センセを甘やかして、あたしに何の利益があるのよ。あたしの優しさは娘と患者さんに注<sup>そそ</sup>いで限界よ」

……ご主人には注<sup>ま</sup>がないらしい。

「ま、あたしが甘やかさない分、舞桜ちゃんが甘やかしてあげればいいじゃない」

「六つも年上の男の人を甘やかす甲斐性は、私にはありません」

それに、環先生はご家族から存分に甘やかされているっぽいし。時々、お兄さんお姉さんが「誰か環を困らせてないか」と、明後日<sup>あさって</sup>の方向の心配をして様子を見に来るくらいだ。環先生はかなりの嫌がっているけど。

内心では「どうせなら、晃先生が来てくれればいいな」と、思っているのは内緒だ。

「じゃあ舞桜ちゃんが環センセに甘えたら？ 末っ子だから弟が妹が欲しかったって、前に言っただし、甘やかしてくれるわよきつ」と

「何の意味があるんですか、その行為に。何より、公私混同はよくないです」

「意味ならあるわよ。環センセが機嫌良く仕事してくれれば、あたしは助かる。すごく助かる」

それはわかる。医師と患者さん——保護者との関係が険悪になってしまうと、看護師はとても大



変なのだ。

「融通が利かないって言うか真面目すぎるからさあ。体調の悪い子をすぐに連れてこない親がいると不機嫌になるでしょ、環センセ。患者を心配するのはいいんだけど、家庭によつては、すぐに病院にかかれぬ事情もあるってわからないの。深窓のご令嬢並みの箱入り娘だから」

「……誰が箱入り娘だ」

タイミング悪く戻つて来た環先生は、少し不機嫌そうに大瀬さんに突っ込んだ。

「自覚ないんですかー？ センセは、箱入り娘並みの世間知らずですよ」

むう、と拗ねた顔になる環先生が、ちよつと可愛かつた。

「俺が世間知らずなのは認めるが、箱入り娘はないだろう」

「たとえ。比喩ですよセンセ。そのくらいわかりましょーよ。無駄に学歴いいんだから」

「確かに無駄な学歴だった……」

不意に、環先生はずーんと落ち込んだ。

「学歴がどうだろうと、医師としての能力には関係ないしな……やつぱり臨床系じゃなくて研究に進んだ方がよかつたか……」

「……箱入り娘並みの世間知らずって言われただけで、そこまで飛躍します……？」

「そうやつて極論に走るところが、世間知らずなお子様なんですよ、センセ」

あ、箱入り娘からお子様にならされた。

それに気づいたのか気づいていないのか、環先生は悩ましげに溜息をついて呟く。

「まあ、家族の過干渉を受け入れている時点で、多少は箱入りの自覚はある」

「多少……」

多少つてレベルか？ と思うくらい、環先生は干渉されまくっている。それを「多少」で済ませしてしまうあたり、無関心なのか寛容なのかわからない。

けど、本人が「多少」と言うんだから、気にしないでいい。私から見ても、環先生はかなりの

箱入り令息だけど、大瀬さんと二人して追い詰めてはいけない。

「箱入りでも世間知らずでも、患者さんに寄り添えるお医者様ならいいんじゃないですか？」

「そう在ればいいんだけどな」

私の言葉に、環先生が少し笑つて頷く。

「舞桜ちゃん、その調子で環センセを甘やかしてちょうだい。さー、午後の診察始まりますよー」

そう言つて、大瀬さんが診察室のプレートを「診療中」に変えた。

\* \* \*

「環」

……あ、今日も来た。

午後の診察時間が終わりに近づいた頃。小児科に現れたその人達に、私だけでなく、環先生も大瀬さんも同じ思いで視線を向ける。

私はできるだけ丁寧に。大瀬さんは適度に丁寧に。環先生は——見ていなかった。

「今日は腸重積の患者を診たそうだな。あれは発症から二十四時間を超えると大変なんだ、よく気づいたね」

「……症状と検査結果を照らし合わせて気づかなかつたら、医師なんてやつてられないだろ」

「何言ってるの、問診しただけで超音波検査を指示できたのはすごいわよ。威張っていいのよ、環」

ひたすら環先生を褒めて「こつちを向いて構ってくれ」攻撃しているのは、環先生のお兄さんの始先生、お姉さんの円先生である。……そんなに可愛いのか、末弟が。

「兄さん。姉さん。正直、俺は馬鹿にされてる気がしてならないんだが」

「……うん、まあ……腸重積はそれなりに珍しい症例だけど、あまり「すごいすごい」と褒められると「馬鹿にされてる」気持ちになるのは何となくわかる。

今の環先生の状況をたとえるなら——中学生向けの問題集を解いて、過剰に褒められている高校生みたいな心境だろう。

「そういうわけで、やっぱりこの週末は家に帰るのはやめる」

「環っ！」

「待って、そんなの基兄さん達に何を言われるか……」

「もう三十近い弟に執着するな、ブラコンか」

おっと、普段は「二十八だ、三十路つて言うな」と大瀬さんに抗議している環先生が、自らアラ

サーカードを切っている。これ、かなり嫌がつてるなあ。

「……まあ、ほぼ毎日来られたら、嫌にもなるか。」

大瀬さんに至っては、始先生と円先生を無視して「検査室行ってきまーす」と、血液検査その他の結果をもらいに行ってしまった。本来、結果一覽をもらいに行くのは私の仕事なんだけど、大瀬さんはここから逃げる口実にしたようだ。出し抜かれてしまった。

「それに、俺は忙しい」

「忙しって。休日医や夜勤は別にいるんだし、土日はちゃんと休めるはずだぞ」

「先月戻されたレセプトを再チェックして、戻された理由を調べたい」

やはり環先生は真面目だ。レセプトチェックは基本専門チームがやっているけど、たまに医師に戻される場合もある。先月戻された分は、きちんと直して再提出したものの、何故戻されたか調べたおきたいらしい。

「薬剤名と病名が一致しないと、拒否されることがあるんですよ。薬剤表に適応病名例が載ってますから、よければお持ちしますけど」

思わず口を挟んでしまったのは、環先生のこういう真面目なところに私は好感というか敬意を持っているからだ。

「薬剤表って、君、持ってるのか？」

「はい。最新版だけですけど」

——勉強に必要なので買ったのだ。高かった……！

「俺のは少し古いから、貸してもらえたら助かる。ありがとう、御園」

にっこり笑った環先生は、本当に綺麗だ。大人の男の人なのに、こういう無邪気で素直な笑顔を見ると、何となく庇護欲をそられてしまう。

「クラークには優しいのね、環……」

「いいことだよ、円。部下に厳しく当たるのはよくない。よくないが……」

羨ましいはずの妬ましいという視線で私を見ないでください。

本当に弟が可愛くて仕方ないらしい始先生と円先生を、環先生は「いい加減、診察室に帰って仕事しろ」と追い返した。

これ以上環先生の機嫌を損ねたくないらしいお二人がとぼとぼ帰っていくと、環先生は深々と溜息をついている。

診察室の隣の小休憩スペースには冷蔵庫があるので、私はそこから缶コーヒーを持ってきた。

「どうぞ」

「ん。ありがとう」

こんな些細なことにまきちんとお礼を言うのだから、環先生は厳しく睨けられているのだろう。

「……あと、さつきは助かった。話を逸らしてくれて」

「逸らすほどの意図はなかったんですけど……環先生がちよつとご機嫌斜めになったので」

私がかからかうように答えたら、環先生も苦笑した。

「斜めというよりは直角になってたかな。……悪気がないのも、純粹に褒めてくれるのもわかっ

てるんだが……さすがに構われすぎるとな。ありがたいと思うより、鬱陶しい」

「弟さん思いなんですよ」

「自分の子供達に構えたいのに、何故か俺に構うんだ……」

年が離れてるせいかなと思案しながら、環先生は缶コーヒーを飲み干して眉をひそめた。

「ちよつと苦いな、これ」

「いつものコーヒーですけど。それが苦いってことは、環先生、疲れてるんじゃないですか？」

「……兄達に疲れさせられた自覚はある」

「たった五分程度で、何言ってるんですか」

「精神的な疲労は、肉体の疲労を深めることもあるんだ。——ああ、忘れるところだった。本当に借りていいのか、薬剤表」

「あ、はい。明日にでもお持ちします」

「いや、あれ結構重いだろ。着払いで送ってくれ」

確かに、薬剤表は重い。私が持つてくるのも大変だし、環先生が持ち帰るにも荷物になる大きさではある。

「ここに送ってくれると助かる」

そう言っ環先生に渡されたメモに記された住所は、職員寮の一室だった。篠宮家は高級マンションやビルも所有しているセレブさんなのに、職員寮住まいというところが環先生らしいとい

「ご実家じゃないんですか」

「……あの二人だけじゃなくて、更に二人いるんだぞ、俺の兄姉は。しかも全員が敷地内に住んでいる。誰がそんな気疲れするところで生活したいと思うんだ……」

下のお兄さんである基先生、お姉さんの遥先生。こちらの二人も、上の二人に負けず劣らず環先生に過干渉である。

「……お察しします」

「適当に相手をするのがよくないのかもな。いつそ、俺に恋人でもできれば、おとなしくなるかと思っただけがあるが……」

冗談めかした言葉に、何故かどくんと心臓が強く脈打った。

「なあ御園、俺の精神安定の為に、付き合ってるフリとかする気ないか？」

「怒りますよ。そういうのは、セクハラです」

「考えてみる。大瀬に言ったら——」

私が怒ってみせると、環先生はごく真面目な口調で続けた。

「間違いない返事は『じゃー、月いくらの契約にします？ あたし既婚者なんで、そのリスク含めた金額設定にしてください』だ。頼むとしたら、君しかいない」

「それは本当に否定できませんが、駄目です。頑張つて、婚活でも何でもして、恋人を作ってください。大丈夫です、医師は引く手あまただし、環先生の外見は完璧ですから」

私は一気にそう言つて、コーヒーを飲み干した。

「診察時間終わったので、キッズスペースを片づけてきます」

思わず逃げてしまったのは、環先生らしくない冗談を言われたからだ。びっくりして、それどころかちよつとドキドキしただけ。

だって普段はあんな冗談を言う人じゃないもの。きつと環先生も、お兄さん達の相手に疲れていただけだ、うん。たぶん。

——それなりに、気の置けない相手だと思つてくれているのがわかつて嬉しい。と同時に、逃げてしまった理由を考えてはいけない気がして、私はキッズスペースに散らばった絵本やぬいぐるみを黙々と片づけた。

——このところ、環先生の雰囲気が変わった。機嫌が悪いとかではなく、何だか今までと違う。仕事については、大瀬さん曰く「普段通り」。そもそも環先生は新人の部類だから、難しい患者さんはあまり回つてこないそうなので、問題はないらしい。ただ、普段の行動その他がおかしいのだ。

例えば診察の合間。今までの環先生は、難しそうな医学書を読んだり、新薬の効果や副作用について調べたりしていた。

まだ新米だからと勉強に勤しむ姿を、私は密かに尊敬していたし、自分も負けずに、もっとスキルアップしようと診療情報管理士の勉強をしたりしていた。

「……大瀬さん」

私は大瀬さんと一緒に職員食堂でランチタイム中だ。

格安というより激安で提供される昼食は、三日前までに予約必須だけど安くとてもおいしい。

金曜日は特に破格の二百円である。ちなみに割り箸ばしはないので、お箸はしは持参するか借りなくてはならない。

「……何、舞桜ちゃん」

「やっぱり、環先生、何かおかしいですよね」

「うん」

即答して、大瀬さんはお味噌汁に口をつけた。

「明らかにおかしい。いや診察とか処置とかは問題ないんだけど、何とか全体的に雰囲気がおかしい」

「ですよね」

どこがどうとは言えない。が、環先生の様子が普段と違う。怠惰たいだというほどではないが、それに近い気怠けだるい雰囲気なのだ。

「何があったんでしようか」

「さあ。あたし、環センセのプライベートに興味ないし」

でも、と大瀬さんは続けた。

「あんな状態が続くようだと、あたしの出産計画が狂うから困るのよね」

「え。大瀬さん、おめでたですか？」

「違う違う、まだですよ。そろそろ二人目欲しいなーとは思ってるけど」

大瀬さんの予定では、半年ちよつと先——私が一年目を無事に終えた頃に妊娠して、数ヶ月後に産休育休に入りたいのだそうだ。

そんな予定通りに妊娠できるのかはさておいて、計画として、「二人目を作るのは舞桜ちゃんが一人前になってから」と、決めていたそう。

「一年で一人前になっている自信は、ありません」

正直に吐露とろしたら、大瀬さんは朗らかに笑った。

「大丈夫。舞桜ちゃん、今までミスしたことないし」

今までミスしてないから、今後もしないとは言えないのだけど。

それよりも、と話を戻される。

「環センセだけど。……あんな色気駄々漏れで仕事されると、免疫のない看護師がやられるから勘弁してほしいのよ」

「……はい？」

十穀米のご飯を零しそうになった私に、大瀬さんがほっとした様子で笑った。

「舞桜ちゃんは気づいてなかったか。よかった。……いや、環センセ、顔はいいでしょ。おまけに、ここの経営者一族。しかも末っ子だから、同居問題の苦労もない」

篠宮家は代々医師ばかりだし、環先生にはお兄さんが二人いる。

「それに、独立するにしても、ここに留まるにしてもお金の心配はないし。恋人としてはどうだか

知らないけど、結婚するにはもってこいの相手なわけよ」

「はあ」

環先生が、恋人として魅力的かどうかはわからないが、一般的に「医師」は結婚相手として人気が高いというのわかる。

「本人は仕事一筋で無頓着だから、普段はアプローチかけられても無自覚に躲してるんだけど。ここで働いていて、院長の孫息子に火遊び仕掛ける馬鹿もいないしさ」

「ただ、と大瀬さんはマイ箸に力を込めた。

「あんな風は無駄に色気を振りまかれるとね……。その気のなかった子達も、誘蛾灯に引き寄せられる羽虫みたいにふらふらっといっちゃうのよ」

そして痴情のもつれに発展し、結局退職する。

これは経験則なのだと、大瀬さんは溜息をついた。

「……そんなに色気振りまいてます？」

確かに気怠げでアンニュイな——モノクロなフランス映画っぽい雰囲気漂わせてはいるが、あれは色気なのだろうか。

「舞桜ちゃんて……やっぱり変わってるわよね」

「そうですか？」

「あれに色気感じないなら、どんな男に色気を感じるのよ」

大瀬さんのセクハラギリギリな質問に、私はちよつと考え込んだ。

「……そもそも、男の人の色気というものがわかりません」

「まさか、交際経験ゼロとか言う？」

「お付き合いした人はいますけど……」

お互いにごく普通の学生だったから、「色気」と言われてもピンとこない。

「イケメン俳優見て『セクシーだわ！』とかないの？」

「格好いいなーとかは思いますけど。セクシー……?」

そこで大瀬さんは今人気の俳優さんや男性アイドルの名前を羅列していく。だけど、やっぱりわからない私は、曖昧に笑って誤魔化そうと試みた。

「舞桜ちゃん。大瀬さんとコイバナしようか。舞桜ちゃんの恋愛観を知りたい」

——誤魔化されてくれなかった大瀬さんは、イイ笑顔で続けた。

「今日、空いてるよね？」

「……はい。大瀬さんとサシ呑みしたいなって思ってます」

「空気を読める子は大好きよ」

でも読みすぎると自分を追い込むから程々にね、と言いながら、大瀬さんは今晚のお店を予約してくれた。

その日、大瀬さんが連れて行ってくれたのは、昼間はカフェ、夜はダイニングバーというお店だった。中に入ると、混雑はしていないが閑散ともしていない、ちょうどいい具合にお客さんが

いる。

内装は中華料理店のような派手な色彩だけど、居心地は悪くない。

いくつか料理をオーダーして一息ついたところで、大瀬さんがにこしながら尋問を開始した。

「舞桜ちゃん、ほんつとに環センセに興味ない？」

「興味と言われると」

ないわけではない。だって晃先生のお孫さんだから。ぜひともご自宅にいる時のプライベートな晃先生について、聞かせてほしい。

「え、恋愛的に興味があるの？」

「それはありませんが……声は好きですね」

私の答えに、大瀬さんは深々と頷いた。

「ああ、声もいいわよね、あの人。そうか、色気には気づかないけど、声にはやられちゃってんのね……」

「待ってください、私が……何かその、そんな感じに聞こえる言い方は」

「あ、ごめん。お前はあげすけすぎるって、よく夫にも注意されるんだけど、ついうっかり」

「変な噂が立ったら、どうするんですか」

「ごめん、ごめん。お詫びに、ここはおねーさんが奢ろう」

「駄目ですよ。家計を預かっている人が、簡単に奢ったりしたら。ここは割り勘で、端数を大瀬さん持ちということでお願いします」

「気配りの塊かたまりのような子ですね、舞桜ちゃんは！」

抱き締めた！ と言う大瀬さんは、少しばかり軽いけど、憎めないいい人だ。

「前から聞きたかったんだけど、舞桜ちゃんって四大卒よね。それで医療事務の経験あるって、珍しくない？」

「そうですね」

「うん。医療系の専門学校卒ならわかるけど、舞桜ちゃんは医療系学部でもないしさ」

「バイト程度の経験ですが」

「普通の女子大生は、医療事務より受付事務とかじゃないの？」

「資格を取ったので、経験を積んでおきたくて」

「……医療事務にこだわった理由が知りたいなあ」

「……大瀬さん」

途切れない質問に違和感を覚え、私は海鮮のアヒージョを食べていた手を止めて笑みを作る。いつもの大瀬さんなら立ち入ってこないプライベートな部分への質問は、絶対におかしい。

「誰かに何か頼まりました？」

「何のことだか」

「具体的には、環先生の駄々漏れの色気にやられちゃった看護師仲間あたりでしょうか」

さっきは「待って」と言った表現をあえて使った私に、大瀬さんは早々に白旗を揚げた。

「誘蛾灯ゆうがとうに引つかかった羽虫に、来月の有休希望日と引き換えに買収されました！」

「あー……その日って、娘さんの参観日でしたね」

少し前、シフト希望が通らなかつたと嘆く大瀬さんを、託児所帰りの娘さんががっかりしながらも慰めていたのを見た。事情がわかるので、私もあまり責める気にはなれない。

「じゃあ、その羽虫さんにちゃんと書いておいてください。私は環先生に、恋愛的な興味はありません」

「それは、二人と一緒に働いてるあたしにはわかるんだけど。脳内が恋愛一色の連中には伝わらないと思いますか」

結構毒を吐くあたり、大瀬さんも不意だったんだなとよくわかる。

「私の志望動機を知って、相手が納得してくれるとは限りませんよ。……私、小さい頃、ここで病気を治してもらったんです。それが切っ掛けで、医療の仕事をしたくなって思い始めたんですよね。でも私は理系が全然駄目だったから、消去法で医療事務に行き着いたんです」

私の答えに、大瀬さんは「ごめんね」と謝った。

「どうして大瀬さんが謝るんですか」

「だって、事情聴取みたいになっちゃって。プライベートのことなのに……」

「別に隠してたわけでもないですから。それに、環先生に恋愛感情はないですけど、ここで働きたかった理由はありますよ」

「聞いてもいいなら聞きたいぞ」

気まずくなりかけた雰囲気は何とかしようと、私が振った話題に大瀬さんがノッてくれる。

「ここに、憧れの先生がいるんです。少しでもその人の近くで働きたい、役に立ちたいって思ったのが始まりですけど、私は理系全般が本当に駄目なので」

「看護師なら、そこまで理系にこだわらなくても何とかなるわよ？　今から目指す？　看護学校の費用を出してくれる制度もあるわよ、ここ」

「私、点滴とか注射するのが怖いんですよ……。あと、解剖見学もあると聞いて諦めました……」

私は、ホラーとスプラッターには耐えられない小心者である。

「自分が血を流すのはいいんですけど、他人様に血を流させるなんて怖くて」

「そこは個人差だから仕方ないわね」

ホワイトアスパラガスのシュゼットを堪能しながら、私は話を続けた。

「それで、医療事務なら私でも何とかできそうだと思います、クラークと事務の資格を取ったんです。で、実務経験の為にバイトしました。——すみません、こんな動機で」

「どうして謝るの？　病院勤務だからって、皆が皆、医療最優先じゃないわよ。売店のおばちゃん……お姉さんは売ることが仕事だし、経理や財務の人は経営が仕事だし。みんなそれぞれ、必要な仕事でしょ」

シヨットグラスを空にして、大瀬さんは意外なくらい真面目な顔で私に言った。

「動機が何であれ、舞桜ちゃんは今、ちゃんと仕事してるじゃない。どの先生の役に立ちたかったのかは知らないけど、少なくともあたしも環センセも、舞桜ちゃんがいてくれて助かってる」

「でも」



「あたしが看護師を選択した理由なんか、一人で生きていく為の手段よ？ それに比べたら、『憧れの先生の傍で働きたい、役に立ちたい』なんて、純情すぎて可愛いわ」

確かに、看護師は仕事に困らないと聞いたことはある、が。

「……最後、軽く馬鹿にしません……？」

「二十歳そこそこの女の子の『憧れ』なんて、経産婦には初々しすぎてねえ。眩しいわー」

「わかりました。私、今後は環先生に必要以上にべたべたしますから、大瀬さんは誘蛾灯の羽虫さんに恨まれてください」

わざと拗ねてみせた私の言葉に、大瀬さんが「ごめんなさい、ごめんなさい」と大袈裟に謝ってきて——二人で笑い合っつて。それから食べて飲んで、お店を出た。

「舞桜ちゃん」

「はい？」

別れ際、タクシーを待ちながら、大瀬さんがわりと真面目なトーンで私を呼んだ。

「さっきの話……環センセに話してもいい？」

「いいですけど」

「ありがと。うん、あたしの気のせい……という可能性は限りなく低いんだけど、まあそういうことで。今後、あの色気にやられないでね！」

……よくわからないことを言っつて、大瀬さんは来たタクシーに私を乗せると、手を振っつて見送っつてくれた。

家が反対方向でなければ、同乗して続きを聞けたんだけどな。

## 2 再会

俺の専属クラークとして配属されたのは、大学を出たばかりの二十二歳の女だった。

名前は御園舞桜。

すつきりと整った容貌に、周囲に不快感を与えない程度の薄化粧。

仕事を始めて三ヶ月の新人だから、まだ俺や大瀬のフォローは必要だが、仕事自体はきちんとこなしている。

こちらが指示したことに対してミスをしたことはないし、患者や保護者にも丁寧に対応している。医療クラークと事務の実務経験があるとかで、薬剤名の覚えもいい。

……何より。

俺の字を解読できる希有な人材だ。

時間が経過したら俺自身ですら悩むことがある字を、きちんと読めている。感心すると同時に少し怖かったのは伏せておく。どうして一切の躊躇いも間違いもなく読めるんだ。

これまで付いたクラークは、俺の字が読めずにミスすることが多かった。だが、御園舞桜にはそれが無い。

事務長を務めている叔父——叔母の夫には、「間違っても辞められないように気をつけて接してくれ」と懇願された。

今までは、伝達ミスを防ぐ為にいちいち処置内容を確認してもらう必要があり、その都度手を止められる他部署に余計な負荷をかけてしまい、内心落ち込んでいた。

もちろん、現状を打開すべく、悪筆改善にも最大限の努力をした——が、硬筆や書道は昇段試験に合格できるレベルで書けるのに、何故か日常生活にそれが反映されなかった。というか、カルテを硬筆並みの楷書で書くのは無理がありすぎる。

だが、人の命を預かる仕事なのに、その指示を機械に頼りきりにするというのは、どうにも不安で——これはいいさまも同じ考えらしく、俺の「手書きカルテで指示した内容を電子カルテに書き込む」という二度手間なやり方を黙認してくれている。

とはいえ、各所には迷惑なことだろう。

だから、御園の存在は、本当にありがたかった。

彼女は俺の字を難なく読んでくれるから、俺は手書きカルテと治療に集中できるし、大瀬達もいちいち俺に指示の確認をする手間がなくなった。

毎日淡々と仕事をこなしてくれる彼女を、俺はもちろん、大瀬も高く評価していた。

大瀬などは「環センチの、ほんつと無駄に無意味に整った顔に見惚れて仕事にならなかった今までの子とは違いますね！ 舞桜ちゃんが環センチに微塵も興味なくて助かります！」と、喜びながら、遠回しに俺を責めていた。

それも当然で、俺の字が読めないのは仕方なくても、仕事をしないクラークなんか知らないです！、と言う大瀬の意を受け、何度専属に付いたクラークに異動してもらったかわからない。

まあ、そういう手合いは大抵すぐに辞めていったが。

事務長が「頼むから御園さんには辞められないように」と言ったのは、俺の専属クラークを手配するのが、徐々に高難度ミッションと化しているせいだ。そこは申し訳なく思っている。

今日も手際よく入力する御園を見ながら、午後のスケジュールを確認した。青藍薬業のMR——医療情報担当者が、新薬の説明と営業に来る予定だった。

「御園」

「はい」

即座に返事があるが、彼女は俺の方を見ることなく、手書きカルテを確認しながら軽やかにキーボードを叩いている。彼女は、患者や大瀬相手とは違って、俺には愛想がない。

「今日の午後は休診だが、MRが来る。新薬のことだから、君も付き合えるなら同席してほしい」  
本当は看護師である大瀬が同席した方がいいが、これも勉強だ。

クラークにも、多少は新薬の知識を持つてもらいたい。医師だって人間なので処方ミスをするかもしれない。それを防ぐ為にも、必要なことだろう。

そういったことを説明する前に、御園はわかりましたと頷いた。休診、つまり午後は彼女のフリータイムのだが、嫌がる様子はない。

「青藍薬業さんは、何時にいらっしゃるんですか？」

「二時半かな。話に時間がかかりそうだから、回診が終わってからになる」  
「わかりました。……あの」

御園は、少し考え込むように目を伏せた。  
影を落とすほど長い睫毛。特に手入れした様子はないのに、自然と艶めいた雰囲気を醸し出している。色気というよりは物憂げな表情に、一瞬、目を奪われた。

瞬間的に意識を切り替える。職場で何を考えているんだ俺は。

「環先生の回診にも、ご一緒させていたいただきたいのですが」

無理矢理落ち着かせた思考で、御園の言葉を振り返る。

「入院を担当したいのか？」

「病棟希望ではありませんが、私は環先生の専属ですから」

確かに、他の医師の専属クラークは、外来と病棟にそれぞれ一人ずついる。

だが、医師として半人前の俺は、担当する入院患者も少ないので、病棟は他の小児科医の専属クラーク達が手分けして担当してくれていた。

何故突然、御園が回診に同行したいと言い出したのかと思っていると――

「……先日、病棟の河原さんが『環先生の指示が読めない』と、確認にいらっしゃったので……」

――反論できなかった。

御園が「自分の分を買うついでですから」と買ってきてくれたコンビニのパンとコーヒードで昼食

を済ませ、少し早めに回診に出ることにした。

「私、入院棟に入るのは久しぶりです」

どこか弾んだ様子の御園は珍しい。

入院棟だから場違いにはしゃいではないが、目がキラキラしている。

こんな風に、嬉しそうというか、感情を表に出しているのを初めて見た。無表情な美人系だと思っていたが、零れそうな笑みを浮かべている。

うちの家系は、顔立ちが整っているらしいので、兄も姉も俺も、昔から異性絡みの問題をそれなりに経験している。

特に、既婚の兄達と違って独身の俺は、これまで専属に付いたクラークに言い寄られることも少なくなかった為、職務上以外の接触は避けてきた。だが、御園はそんな素振りもなく、とにかく仕事に真面目だ。

その様子が、不思議と見ていて飽きない。飽きないと思う程度には、俺は御園を眺めていた。  
何というか……無意識に、目が彼女を追ってしまっ。

そんなことは御園が初めてだったから、自分の行動が理解できずに、戸惑った。

底のない思索に沈み込みそうになるが、ふと、御園の言葉に引っかかりを覚える。

「――入院棟が久しぶり？ 来たことがあるのか？」

「はい。九歳か十歳の時に、ここに入院してたんです。でも、改築される前のことだから、実質的には初めて……あ、あの絵は見覚えがあります」

御園の視線の先には、祖母が趣味で描いた花や樹木の絵が飾られている。

祖母は元々画家になりたかったらしいが、親に許されなかったそうだ。結婚後、祖父に「好きなことをしなさい」と勧められて、日本画を本格的に習った結果、個展を開いたり画廊（うらみ）がご機嫌伺いに来るレベルの著名な画家になった。

「病院にある絵って大抵花ですけど、あれは花だけじゃなくて背景まで色使いが優しくて、子供の時から好きなんです」

まあ、子供達が落ち着く絵がいいと祖父に頼まれた祖母が、そういう絵を描いたんだから、御園の感想は祖父の願通りだ。よかった。

「ナースステーションや病室の配置が、結構変わってますね」

「キッズルームやら何やら、増やしたからな。基本個室にしたし」

篠宮総合病院の方針として、本来付き添いは不要である。だが、子供達の精神安定上、親と一緒にの方がいい場合もあるので、いつでも泊まり込みができるようにと考慮した結果、個室を増やしたらしい。

他愛ないことを話しながらナースステーションに到着し、俺は今日回診する患者について変更がないか確かめた。

「特に何もなし？」

俺の声に、小児科入院棟の看護師が「はい」と答える。俺は電子カルテのタブレットを受け取り、御園に渡した。

そのまま、「篠宮」と書かれた柵から担当患者の紙カルテを取り出し、御園に声をかける。

「とりあえず、俺の指示を簡単に入力するだけでいい。あとでカルテを見て再入力してもらおう」

「はい」

「使い方は、外来のものと同じ……らしい。多少は仕様が違うかもしれないが」

正直、俺にはクラークや医療事務、看護師や助手の仕事の細かい違いはわからない。

「わかりました。書きカルテの方にしっかり書いておいてくだされば、大丈夫です」

頷いた御園の言葉に、ナースステーションが一瞬ざわめいた。俺の悪筆は、小児科全体どころか院内すべてに広まっている。

だが、本人の前で「ほんとにあの字を読めるんだ……」と、口にするのは如何（い）なものかと思う。

「環先生の字は少し癖（くせ）がありますが、読みやすいですよ？」

「ないわ。舞桜ちゃん、それはないわ」

いつの間にか俺達の後ろにいた大瀬が、首を横に振って否定した。

「百歩譲って『読める』は認めるけど——」

そこで一呼吸置いて、大瀬は静かにはっきりと断言した。

「読みやすい、は絶対じゃない。だって、古文書や下手（へた）なドイツ語の筆記体を読める子ですら、匙（さじ）を投げたんだから」

俺の古傷を思い切り抉（えぐ）つてくる大瀬に、御園は困ったような顔をして俺を見上げた。

「達筆っていうんでしょうか。私は好きな字ですけど」

その言葉に、嘘も媚<sup>こ</sup>びもまったく感じなかったから——自然と、俺の御園への好感度が上がった。我ながら単純だと思いが、コンプレックスを好意的に受け取られたのは初めてなのだから、仕方ないだろう。

\* \* \*

「御園。今日はどうする」

どうする、というのは、週に一度、入院棟への回診に同行するか否<sup>い</sup>かだ。

御園が断ったことはないが、時間外勤務でもあるから、毎回確認している。……こういうところが、融通<sup>ゆづり</sup>が利かないと言われる所以<sup>ゆえん</sup>だろうか。

「行きます」

病棟クラーク達ともそこそこ親しくなったらしく、時々、直接御園宛に内線が入る。そのあと、御園が入院棟に行くということは……まあ、「読めない字がある」と呼びつけられているんだろうと推測できた。御園には、そのうち何らかのねぎらいが必要な気がする。

「君、病棟クラークになる気はないのに、よく毎回ついてくるな」

「ご迷惑ですか？」

「助かっている。指示を何度も確認し合うのはお互い時間の無駄だし、俺も迷惑をかけている自覚があるからな」

俺の自嘲<sup>じちやう</sup>気味の言葉に、御園は困ったように笑った。

「私が異動したらどうするつもりですか」

「異動？」

「例えば、です。まあ、私は環先生の字が読めるというだけで採用していただいたので、異動の可能性は限りなく低いんですけど」

——御園が異動、もしくは退職する可能性は、考えたことがなかった。

異動はないにしても、結婚したら退職することはあり得る。うちは福利厚生は充実しているから、結婚出産しても退職する職員はほとんどいないが、夫が専業主婦希望なのでと辞めた看護師もいた。そうなれば、また後任について考えなければならない。だが、何となくそれが嫌で、今は考えないことにした。

その時、ナースステーションがざわついていることに気づく。

明らかに外国人といった風貌の男が、必死に何か話していた。

「——どうかしたのか？」

俺が声をかけると、看護師達がほっとした顔になる。

「たぶん……どこか悪くて診察してほしいようです。今は外来が休診時間だから、ここに来てしまったみたいなんです」

「ならそう言えば……」

「言葉が通じなくて。私達も、英語なら何とかなるんですけど」

困りきつた看護師達は、明らかに俺に「通訳してくれ」という視線を向けている。男性の方も、<sup>あぶらあせ</sup>脂汗を浮かべて俺を凝視した。

「英語が通じなくて、この金髪碧眼へまがんとなると——フランス語は？ 誰か試したか？」

「今のところ、英語とフランス語は通じませんでした」

正直、西洋人にアジア系の区別がつきにくいように、こちらも西洋人の区別はつきにくいわけで。俺は、知る限りの言語で、片っ端から話しかけてみた。

すると、オランダ語に反応があった。

『オランダ語はわかりますか？』

『わかる！ 僕はアムステルダムから御朱印状ごしゅいんじょうを巡る旅めぐに来たんです』

……洗あらいい趣味しゅみだな。

『それで、どうされました？ 治療ということなら、今は診察時間外ですが……』

『治療というほどじゃないんです。僕、ずっと歩いているので湿布が欲しくて』

『……湿布？ 薬局で買えますよ？』

俺がそう言うと、彼は首を横に振った。種類が多すぎて、どれが適しているのかわからないし、薬局の店員には言葉が通じない。カタコトの英語で、「篠宮病院なら言葉の通じる人がいるかもしれない」と言われたそうだ。

……医者を通訳扱いするなど言いたいが、見知らぬ国に一人で来て、体に不調がある人を放置もできない。

『痛み方は？』

『アナタは医者？』

『整形外科は専門外ですけどね。湿布の種類くらいならわかりますよ』

何せ小児科だ。子供達は病気だけでなく怪我で受診することも多い。

俺はアルブレヒトと名乗った男性を簡単に問診する。そして、ナースステーションの近くにあるソファに座らせ、足の様子を診みた。かなり歩いたのだろう、血豆ができているし、靴擦れを起している。それと浮腫むはみか。

『アルブレヒトさん。湿布はこの成分が入ったもの——ああ、書きますから薬局の店員に見せてください。それから、血豆と靴擦れがあるから、余裕があったら靴を買換かえることをお勧めします。じゃあ、手当てしますから、こちらに』

俺が空あいている病室を借りて治療しようとする、アルブレヒトは困った顔になった。

『センセイ、僕、そんなにお金は……』

『別にレントゲン撮とったりはしないし、血豆と靴擦れの手当てなら三千円くらいかな。——御朱印状ごしゅいんじょうめく巡り、頑張ごんちやうってください』

俺の言葉に、アルブレヒトは嬉しそうに頷いた。

状況がわからないまま俺達についてきていた御園に、「血豆ができて靴擦れもしているから、簡単に手当てする」と言うと、驚いた顔をされる。

「環先生は、何ヶ国語話せるんですか……」

「さあ、数えたことはない。悪いが、ナースステーションから脱脂綿とアルコールをもらってきてくれないか」

「はい！」

タブレットを抱えたまま、御園はナースステーションに向かい、俺はアルブレヒトの足を触診して、骨折や捻挫の症状がないことを確かめた。レントゲンを撮った方がいいとは思いますが、本人が自費ではそこまで払えないと言う。

外国人旅行者相手でも、きちんとカルテを作って、自費診療扱いにすることになる。なので、パスポートのコピーを取らせてもらった。御園が手際よくカルテを作ってくれたので、そこに処置内容その他を書き込んでいく。

アルブレヒトの手当てを済ませ、彼の足の痛みを取るのに適した湿布を数種類選んで、そのメモを薬局の店員に見せるように指示した。

アルブレヒトは『ありがとう、センセイ、ありがとう』と繰り返しながら、伝わらないオランダ語でナースステーションの看護師達にも『迷惑をかけました』と謝りながら去って行った。

——予定外に時間を使ってしまった。回診もあるし、午後の診察開始時間を少し遅らせるように御園に指示したら、彼女はほっと溜息をついた。

「……何だ、その溜息」

「いえ……やっぱり環先生、優しいなあと思ひまして」

「優しい？」

「患者さんじゃなくても、困ってる人を見捨てられないんだあつて」

——それは人として当たり前のことだろう。まして言葉の通じない場所で困っている相手だ。

「この場で、たまたまアルブレヒトの言葉がわかるのが、俺しかいなかったからだ。……他の医師も、オランダ語のわかる人は何人もいる」

「でも、アルブレヒトさんを助けたのは環先生ですよ」

「……ここで、勝手に診察行為ギリギリのことをして許されるのは、俺や兄達くらいだからな」  
他の医師と俺達兄妹は、雇用されているという点では同じでも、「経営者一族」という点が違って  
いる。多少の無茶を目こぼししてもらえるのは、俺が「篠宮環」だからだ。

「俺に助けられる相手なら助ける。それだけだ」

「だから、そういうところが優しいんですよ」

「……あまり、優しいを連呼されるのも複雑だな」

「優しい人」というのは基本褒め言葉だが、女から男に向ける場合に限り、「恋愛対象外だけ」という声に出さない前置きが付く「優しくていい人」のことだ。

——いや、御園にそう思われていたとしても、特に問題はない……はずだ。

俺の言葉に、御園はくすくすと笑って「優しいですよ」と繰り返している。

「……からかうな」

「優しいなあつて言っただけですよ？」

まだ笑いながら、御園は俺より先に病室を出た。ナースステーションに、借りていた脱脂綿その

他を返しに行くらしい。

だが、ふとその足を止めて、彼女が一点を見つめる。

「晁先生……」

聞いたこともないくらい幸せそうな声だった。

真っ赤な顔をタブレットで隠すようにして見つめている先には、院長回診中の祖父がいる。

後ろに何人か医師を連れてきているから、新人教育中だろうか。そろそろ八十近いから、現場に出ることはほとんどないものの、今も時々、診察や指導を行っている。

どうかしたのかと御園に聞こうとして——やめた。

普段は薄い桜色の頬を、鮮やかな赤に染めて祖父を見つめる御園の姿は、誰がどう見ても「恋する乙女」そのものだったから。

その顔をめちやくちやにしてやりたい、何故かそう思った。

優しいと褒められるより——あの瞳を自分だけに向けてほしかった。

\* \* \*

俺の自宅——病院から徒歩三分のマンションは、一棟まるごと、篠宮総合病院の職員寮だ。

医師と看護師に優先的に割り振られていて、独身の俺は実家ではなくここに部屋を借りている。

独身とはいえ医師なので、研修医期間が終わった時、最上階の2LDKの部屋が俺の部屋になっ

た。夫婦や家族で住む者は低層階に固めているらしい。

この部屋に暮らすようになって二年ほど経つが、状態は越してきた頃とあまり変わらない。寝に帰るだけの部屋だから、必要最低限のものしか置いていなかった。

ベッドだけは、睡眠の質を考えていいものに買い換えたが、「勉強にだって、いいデスクが必要なのよ！」とインテリアにうるさい長姉がローズウツドのデスクを届けてきた。

上品な飴色をした艶のある木製のデスクは、確かにサイズもデザインもいい。だが、別にパイプデスクでも変わらないだろうというのが本音だった。

勉強するのは俺であって、やる気が出るかどうかは、デスクの質よりその日の気分や体調の方が重要だと思っている。

——そう。重要なのは俺自身の気持ちだ。だから、今日のように苛立つて文字が頭に入らない日は、勉強したって効果は薄い。

わかっているが、何もしなければ、頭に浮かぶのは御園のはにかんだ、幸せそうな笑顔。

そして、それをもたらしたのが祖父らしいという事実。

そのことに苛々しながら作った夕食は、我ながら最悪の出来だった。

まともだったのは、電子レンジで温めるタイプの米だけで、味噌汁は薄かったし、鰯は真っ黒に焦げたし、白菜の浅漬は鷹の爪を入れすぎて辛さしかなかった。

捨てるわけにはいかないので食べたが、明日が休みでよかった。腹を壊しかねないひどさだった。食器を片づけたあとは、薄い水割りを作ってグラスの中の丸い氷を眺めた。



「……………」

休日前の夜は、参加できなかった学会のDVDを見たり、海外の最新医療を調べるのが習慣だったのに、何故か今日は感情の切り替えが上手くいかない。

——三ヶ月も一緒にいて、俺は御園のあんな顔を見たことがない。  
嬉しい、だけど恥ずかしいといった表情を見たのは初めてだ。

ぎこちないほど身構えていた最初の頃に比べたら、ずいぶんと打ち解けてきたし、互いに笑ったり冗談を言い合ったりするようになっていた。

だが、あんな——ただ純粋に幸せしか感じていないような、可愛いとしか言えない顔を見たことはなかった。

誰が見ても、あの時の御園は可愛いと思うだろう。それが、無性に腹立たしい。

「ちよつと待て。俺以外に向けて可愛い顔をされたからって、どうして腹が立つんだ」

——自分で突っ込んでから考えるが、要するに……俺は御園が好きなのか？

御園は仕事は真面目で、人当たりも悪くはない。愛嬌を振りまくタイプではないが、大瀬とは仲がいいようだ。

保護者からの質問も、きちんと聞いて俺に伝えるし、勝手な判断もしない。それでいて、俺が対応に困るタイプの相手——話が長引いて診察時間に影響しそうなMRなどへは、毅然と「そろそろ時間ですので」と自分が悪役を買って出る。

空気を読むというか、俺の気持ちやすぐに察してくれた。おかげで、俺は気持ちよく診察ができ

る。今のところ、俺は御園に対して好感しかなかった。

嫌いな部分は、特に見つからない。正確には、御園舞桜という人間をそれほど知らないのだ。

顔は、正直好みかどうか知らない。……可愛いとは思いますが、深く考えたことがなかった。

スタイルについても同様で、気にして見たことがない。身長体重共に標準か、やや痩せ型だろうという程度だ。

御園に対して、好感——ある意味、好意とも言えるだろう——があるのは認める。

だが、好意イコール恋愛とは限らない。

自分で言うのも何だが、これまで「医師」や「実家が病院」という肩書きに寄ってくる女が多かったせいで、疑い深い性格になっているのは否めない。

他にも原因は色々あるが、俺は結婚や交際なんて面倒くさいと思っている。

なので、俺が御園に好意を持ったのは、御園が俺に興味を持っていないからだ。

……待て、その思考もちよつとおかしい。

咄嗟に、思考にストップをかける。

自分に無関心な相手だから惹かれるというのは、心理的にマズいのではないか。

好感ではなく好意があると自覚した途端、俺は何故か御園舞桜に対しての感情整理が上手くできなくなっていた。

こういう時は——寝るに限る。寝るのが一番いい。

俺は答えのない思考を続けるのが嫌になって、ベッドに入った。

「舞桜ちゃん、ここに憧れの先生がいるらしいんです。調べた結果……知りたいですか？」  
患者に向けているにこやかな笑顔ではなく、からかう気満々の笑顔で大瀬が声をかけてきた。  
交換条件として「色気駄々漏れにするの、いい加減やめてくださいね」と言われたが、そんなものは俺の意識下にはないので知ったことではない。

御園の憧れの医師。人生を決めさせた相手。

気にならないわけではない。俺は、どうやら御園のことが好きらしいので。

そして、聞かされた名前に落ち込んだ。

——篠宮晃。

嫌というほど聞き慣れた祖父の名前。俺にとつて、絶対に敵わない相手だった。

医師としてはもちろん、人間性というか器量の部分でも太刀打ちできない存在だ。

御園の憧れが祖父だと聞いた俺が、冗談だと「蹴しなかつたことで、大瀬に「心当たりがあつたりしますか？」と聞かれた。

あの日、病棟で祖父を見た時の御園の顔。

あんな「恋をしています」としか言えない顔を見ていたら、信じざるを得ないだろう。

「だから。そーいう色気駄々漏れは、やめてくださいって言ってるじゃないですか」

今日来院予定の患者のカルテを整理しながら、大瀬が呆れている。御園は受付に他の診療科の急な休診その他を確認しに行った。たまに、耳鼻科に来た子供がこちらに回されることがあるからだ。

「悪いが、俺は男に色気なんか感じないからわからない」

「女にも色気感じたことねーくせに、何言ってるんだかですよ」

「あんな」

「交際経験があるのと、恋愛経験があるのは別ですからね。生理的な欲情と心理的な欲情は別モノです」

患者である子供達やその保護者には優しい大瀬は、俺にはきつい。

「子供相手の職場なんだし、もう少し言葉を選んだらどうだ」

「はつきりきっぱり言わないと、深窓のご令嬢には伝わらませんので」

「上司相手にもパワハラモラハラは成立するって知ってるか？」

「だって環センセ、自分が深窓のご令嬢並みに箱入りの自覚があるって、言ってたでしょ」

多少はあるが、そもそも箱入り息子と深窓の令嬢は決定的に違うと思うが。

「それに——舞桜ちゃんの憧れ、初恋の人が院長先生だからって、拗ねるなんてガキかよって話です」

「……そんなにわかりやすいか、俺は」

「まあ、研修医時代を入れると、四年近く一緒に働いてますから。嫌でもわかりますよ」

俺は、大瀬のことはさっぱりわからないままで。